「国内亡命文学」試論

横塚祥隆

国内亡命[1]及び国内亡命文学については、すでに様々に研究され、もはや新たな成果はえられないという指摘があり[2]、またそれがはたして亡命や亡命文学と比肩しうるような反ファシズム、反ナチ抵抗文学と見なしうるかについても種々の立場から検討されて来ている。さらにはこの奇妙な表現をもった概念及びそれが示す現象についても多くの議論が展開されており、それらすべては「小図書館が出来るくらいであるが、今日にいたるまでこの概念は解明されていない[3]」といわれている。筆者はもとより、その解明を志す者でも、新たな展望を獲得しようとするものでもない。ただ、この問題に興味と関心を抱いて来たものとして――もっともその興味は筆者のドイツ・キリスト教文学に対する関心から、ことにその第三帝国時代のありかたに対する関心から派生したものに過ぎないが――いささかの整理をしようとする「私論」であり、かつまたひもとくべき文献、資料はあまりにも多く、その森の中に踏み迷う虞なしとせず、「試論」とする所以である。

(一)

いま黙っていることは幸せ、
日々の恥ずべき名声から離れているのは快く、
かげのなかに住むのは晴れやか
忘れられることは恵み　孤立させられるのは救い
慰められるのは　涙するものだけ
なぜなら　涙するとは愛すること

愛するとは滅びること　生きながら死すること

ねむるがよい　ねむれよ　わが歌
ねむりこそは死の同胞[4]

沈黙が何故に「幸せ」なのか。街頭にはホルスト・ヴェッセルの歌が響き、人々は民族の指導者に忠誠を誓い、詩人たちは頌詩を捧げる、その「いま」黙っていることが、なぜ「幸せ」なのか。詩人にとって沈黙は死に等しく、しかも作者ル・フォールは沈黙しているわけではない。たしかにル・フォールは時の勢力によって推奨されていたのではなく、かえって「好ましからず」unerwünscht とされていた。この詩を含む「一九三三年から一九四五年に生まれた叙情詩による日記」も、いわゆる「抽斗のなかの文学」であって、それらが書かれた当時に発表されたのではない。しかしそれらの詩は彼女が詩人として決して「沈黙」していたのではないことを証する。さらにこの時期には彼女の代表作に数えられるべきものを含む少なからぬ作品も発表され、書き継がれていた[5]。そうしたことを見れば、ここで言われている「沈黙」はル・フォール自身のことを述べたのではないのではなかろうかと思われて来る。

「いま黙っている」のはル・フォールではなく、沈黙させられたものたちである。それはテロと密告に脅かされる大衆であるかもしれない。しかしなによりもまず第三帝国時代に権力によって沈黙を強いられた詩人・作家、あるいはみずから口を閉ざした詩人たちである。そうしたものたちに向かってル・フォールは

語りかけている。もちろん先に記したようにそのル・フォールの慰めの言葉は公表されず、それらの詩人たちに届いたはずもない。この言葉をみずからは「好ましからず」とされながらも、作品発表を容認されていたものの、そうでないものへの単なる浅薄な同情と見ることも、省みてみずからの恵まれた環境に満足する体の卑劣な自慰行為とも受け取れよう。しかし他方には、いまなお語りうるが故の危険もあった。語りえたが故に、あるいはあえて語ったが故に叛逆罪で訴えられ、強制収容所に拘引され、処刑された詩人たち。それとは対照的に語らんがために、また語りえたが故に、「恥ずべき名声」を得んがために志を曲げ、時流に迎合し、体制と大勢とに適応する誘惑に陥る危険もあった。

ユダヤ系であるが故に沈黙を強いられ、強制労働に就かされ、しかもなお密かに執筆を続けていたエリーザベト・ランゲッサーが「折りよく所謂全国著述院 Reichsschrifttumskammer から追放されて、このやくざものと結託する誘惑に陥らなかったのは(略)自慢するようなことではなく、感謝すべきことなのだ」[6]と述べたのは、ル・フォールの言葉を受けてのことではない、ランゲッサーの右の言明には、国内に残っていた文学者が戦後になって先を争うようにして、ヒトラー時代の被害者であり、みずからの当時の態度、振る舞いは「国内亡命」と見なさるべきものと主張した、その風潮に向かっての皮肉の込められた、しかしまたみずからは作品発表の機会を与えられなかったものの痛切な響きがある。

エルンスト・バルラハは公式には出版禁止も政策禁止も受けなかったが、彼の作品が公衆の目に触れるのを妨害され、禁止され、第二の故郷ギュストロウに軟禁されたも同然の生活を強いられ、そこでの状態を彼は「一種の亡命者の生活」と呼び、さらに「ほんとうの亡命者のそれよりも劣悪である」[7]と述べている。あ

るいはまた、これもしばしば言及される例であるが、ヨッヘン・クレッパーは「私と時代の間には厚い膜があり、邪悪な疎外がはじまるだろう(略)亡命者のような気分は決していいものではない。いまや完全に亡命状態にある」[8]と書き残した。彼はそうした亡命状態が「現今の政治情勢に照らしてみれば、成功するよりもはるかに名誉あることだ」としながらも、執筆しつつあった大作『父。ある国王の物語』の出版の可能性を探り、かつまた収入の道を求めて苦闘しつつ「作家連盟が加入させてくれさえすれば」[9]と苦衷を吐露している。

バルラハやクレッパーが亡命者同然の状態に置かれて、事実上芸術家、詩人としての活動を妨害され、制限されていたことは、「国家的、文化的使命に忠実に参加する義務」[10]を肯んじなければならなかったアカデミー会員とは違って、「恥ずべき名声から離れている」幸せであり、「成功するよりはるかに名誉」であるかもしれない。しかしバルラハ、クレッパー、ランゲッサーたちの気分は「晴れやか」であることから程遠く、「忘れられ、孤立させられる」ことが恵みや救いではないことを示している。[11]

ル・フォールはたぶん美しくうたいすぎた、たとえ沈黙させられたものたちの苦しみを思ってであれ、それがここに反映されているかどうか、それを思いやるル・フォール自身の苦衷が埋め込まれていると言えようか。だが両者の言葉に両者の思いの奇しき符合を見いだし、「ねむるがよい、わが歌」と呼び掛けたそのみずからの歌に、ル・フォールが沈黙させられたものたちの声にならない歌を重ね合わせていたと想像するのは許されるだろう。[12] ル・フォールはル・フォールにふさわしい言葉でうたえばいいのである。

そのル・フォールらしさは「愛することは滅びること　生きながら死すること」の一句にこめられている。

「世間に認められないものこそ文学は抱きとり、文学が抗い難い魅力を覚えるのは追放されたものに身を捧げ、断罪されたもの――罪あって処罰されたものとでも、そのもつれた道を奈落へまでも付き添い、滅びゆくもの、死にゆくものを胸に抱きとめることである」[13]と彼女はエッセイ「キリスト教文学の本質」に記している。もちろん第三帝国の権力によって処罰され、処刑され、あるいは沈黙させられた詩人たちは、ここに言われる「断罪され、処罰されたもの」ではないが、「亡命状態」を強いられたその生活は、まさにそれに等しく、「追放されたもの」にほかならない。ル・フォールはそうした追放されたものたちへ思いを馳せ、そのものたちのたどる道をたどり、いわば「亡命状態」へまでも付き添って行こうとしている、それがよし、滅びにつながるものであれ、その滅びを分かち合おうとしている。[14] ル・フォールはそうしたみずからの文学観をここにも反映させているのであって、諦めと断念を説いているのではない。ましてやそう受け取られかねない死の讃美ではない。

ここで言われる「死」の意味内容は、この詩の前に置かれた次の詩にすでに示唆されている。

まだ覚えている　そのはじまりを　夜毎の夢がおしえてくれた
歌も死ぬことがあるのを、わたしの歌が
小さな死んだ子供たちのように　ひつぎの中によこたわっているのを見て
声を上げて泣いた　荒れ模様の夜は
暗く　うっとうしかった　庭の噴水は途絶えた

赤く　見知らぬ星が天を驚かした
すると　羽ばたきが聞こえた
渡り行く鳥群のように　どよめき寄せて来た　太古の大いなる調べが
ゆっくりと厳かに　数百年の彼方から
わたしの上を越えて　永遠の中へと――
するとまた　峰々から響いた
最後の群の白鳥の歌が
「おお　愛の国よ　ごきげんよう」
そののち調べはもう聞こえない　胸の奥深く
扉が閉じた　終わってしまったのだ[15]

ここに歌われているような「死」を受けて先の詩の「死」がある。ル・フォールは同じ詩編の中で戦禍に倒れたものを歌っていないわけではない。だがここにあらわれる「死」は歌の死であって、詩人たちの沈黙と解してよかろうと思われる。もちろん詩人が詩人であるかぎり、全き沈黙はありえない。沈黙を強いられたものたちとて、それぞれに危険を冒しつつ、みずからの白鳥の歌となりうる歌をひそかに綴っていたのであり、「沈黙」とはその声が聞こえないにすぎない。しかしそのことはこの国に、第三帝国にもはや真に歌とよばるべき歌が存在しない、換言すればあるべきドイツの文学が存在しないことを意味する。[16]

六行目までに呼び覚まされるイメジに、一九三三年五月十日夜にドイツの各大学都市で学生たちによって行われた「焚書」、「非ドイツ的精神に対する闘争」の情景を結び付けるのは、あながち深読みとは言えまい。「そのはじまり」とは「国民の召使いたるべきドイツ文学」のはじまりであり、「非ドイツ的精神」の終焉である。[17]

その終焉はすでに、同年二月十五日のプロイセン芸術院の総会において、当時の文芸部門会長のハインリヒ・マンが形式的にはその会長職を辞し、芸術院からも脱退することによって始まっていた。この芸術院総会はプロイセン文化大臣代理のルストの強い要請によって開かれたものであり、マンの辞任の背後には、芸術院に対する、直接的にはその院長フォン・シリングスに対する圧力と、文芸部門及び芸術院の解散をもってする脅迫が働いていた。[18] その後会員に対してあたかも踏絵を思わせるアンケートが配布され、[19] それに対してリカルダ・フーフは回答を拒否し、同時に脱退を表明した。[20] 焚書の行われる直前の五月五日にはフランツ・ヴェルフェル他九名が除名され、それまでの文芸部門はほとんど完全に解体させられた。

これは芸術院会員という著名人に限ったことであるが、「人間や個人ではなく、国民があらゆる事柄の尺度である」[21]とするナチの文化政策によって禁止されたり、「好ましからず」とされたりした文学者、芸術家等の数は一九三五年だけでも五二四名にのぼった。[22] 焚書を亡命先で知り、しかも自己の作品が焼かれるどころか、ナチの推奨リストに載っているのを知ったオスカー・マリーア・グラーフは、「われを焼け」[23]と抗議の声をあげ、みずから「恥ずべき名声」を投げ捨て、真のドイツ文学、「もうひとつのドイツ」の側についた。ナチはみずからの手によって真のドイツ文学、ドイツの歌を焼き捨てたのである。

そうだとすれば、ル・フォールの言う「沈黙の幸せ」は口を閉じさせられたものへの最高の讃辞となりうる。いまなお語りうる、作品の公表を容認されている自己の文学を、もしかしたら否定することになる矛盾と危険を冒してのオマージュでありうる。だがもちろん彼女はみずからをその「恥ずべき名声」に包まれた詩人に数えてはいない。そのひそかな誇りと沈黙の詩人たちへの親近感とが、彼女に「ねむれ、わが歌」とうたわせるのである。(24)

またここで暗示されているのは、そうした詩人たちの沈黙による歌の死のみではない。「おお　愛の国よ　ごきげんよう」(25)と告げて去って行ったのは、あるいは立ち去らざるをえなかったのは、ル・フォールがまた「多くのものが去って行った　だがわたしは残る／わが祖国の墓所のかたわらに」(26)とうたったその「多くのものたち」、すなわちヒトラーのドイツから追放され、あるいはみずから危険を避けて亡命したものたちである。彼らもまた沈黙させられたものたちだった。その追放されたものたちこそ、輝かしい伝統を受け継ぐ真のドイツ文学の担い手であると自負していたのである。

第三帝国内にはもはや真のドイツ文学は存在しない乃至存在するのはきわめて難しいという認識において、奇妙にも国内に残ったル・フォールと、亡命したものたちの間に一致があった。もちろん両者の間には微妙な差異がある。ル・フォールが第一に沈黙させられた詩人に数えるのは国内に残ったものたちであり、そのものたちは歌の滅びたこの国で、孤独のうちにその胸奥深くひそかに歌を育んでいた。しかし、亡命者たちの思いは国内事情を十分に知ることができなかったこともあって、より複雑であった。

(二)

「多くのものが去って行った　だがわたしは残る／わが祖国の墓所のかたわらに」という一句は、国内に残ったものたちの亡命者に対する微妙な気持ちをうかがわせ、かつ一九三三年から戦後までに生じた両者の間の相互理解と、時には敵意また憎悪と言ってもいいかもしれない齟齬や誤解についても少なからぬことを暗示している。

ル・フォールが、亡命したものたちをどのように考えていたかは詳らかにしえない。しかしたとえば彼女は、その信仰の故に故郷を追われ、一六世紀以来ヨーロッパ各地を転々とした先祖たちのことを思って、「ここから立ち去ることを／彼らはその脚に命じ／世界に語ることができた／もう誰もわたしたちの姿を見たくも思わないのだと」[27]とうたった。そこに込められたル・フォールの亡命者に対する気持ちが、ナチ時代の亡命者たちにたいするものと同質であるとは断言できないが、「しかし故国は変わらず／静かな真実の故国のままであり／わたしたちを追放せず／わたしたちを誠実に見分けてくれた」という一節は、時代背景を異にしているとはいえ、ヒトラー・ドイツではない「もうひとつのドイツ」の代表者をもって任じた亡命者の故国に対する期待と憧れに通じるものがあると言えよう。

しかしまた、「おおくのものが去って行った　だがわたしは残る／わが祖国の墓所のかたわらに」と同じような言葉は、しばしば国内残留者が亡命者を非難し、批判し、みずからの立場を弁護するのにも使われた。しばしば言及されるように、「国内亡命」という語及び概念が世間の注目を浴びるようになったのは、一九

四五年末に行われたヴァルター・フォン・モーロ及びフランク・ティースとトーマス・マンとの間の論争によってであった。[28] そこでティースはドイツの作家であればドイツに帰属し、その持ち場を堅持しようとすべきであり、しかしそれは海のむこうからドイツ国民にメッセージを送ることよりはるかに困難であって、トーマス・マンは居心地の良いアメリカにいて、ドイツの崩壊を目の当たりにすることから免れたのを感謝すべきであると、第一及び第二の書簡で感情的に述べたてた。[29] ティースの第一の書簡及びそれに先立つ、この論争の契機となったモーロの書簡に対する返書において、トーマス・マンは、これもまた少なからず感情的に、この十二年間にドイツ国内で出版された文学は、血と汚辱の臭いがすると、ナチ文学と非ナチ文学あるいは反ナチ文学の区別なしにすべてを切って捨てた。[30] この論争はただに「国内亡命」を浮かびあがらせたのみでなく、国内残留者と亡命者の対立を、その両者に架橋しようとする試みが、少なくとも戦争直後には、様々になされたにもかかわらず、[31] 再燃させたのである。

再燃させたというのは、すでに十二年前、ドイツの文学が国内と国外とに分裂させられた時に、詩人ゴットフリート・ベンとトーマス・マンの息子で作家であったクラウス・マンとの間で、ナチ観とナチに支配される国内に残り文学に携わることとをめぐって有名な論争が行われていたからである。

クラウスは、ベンがなぜいまなお芸術院から脱退しないのかを問い、なぜ世界が顔をそむける程の道徳的不純と、ヨーロッパの歴史に類を見ないほどに低級な文化しか持たないものたちに自分の名前を自由にさせているのかを問い、尊敬する詩人を「向こう側」に失いたくない真情を吐露し、さらには「精神」を失った国でベンが受けるのは忘恩とあざけりだろうと予言する。[32] それに対してベンは、長文の返事を、まず放送を

通じて行ったが、ドイツ国内の事柄について語り合えるのは、ドイツ国内にあってみずからそれを体験しているものたちとであって、外国へ旅立った逃亡者 Flüchtling とではない、と亡命者に対する軽侮を込めた反発をしめした。[33] このベンにみられるような反感が、十二年後のティースの言辞の中に再び現れたのである。しかし、その十二年間における両者の相互に対する感情や見解は、そうした反発や反感ばかりではなかった。

国内に残ったものたちが、亡命したものたちをどのように考えていたかを知るべき手掛かりとなる証言は意外に少ない。それというのも、ナチの支配体制が強化されるにつれて、殊に一九三九年九月の開戦後には、亡命者の作品が国内に持ち込まれることはもちろん、その消息さえ、なんらかの地下組織に関わりのあるものを除けば、ほとんど知ることができなかったからである。[34] ましてや、組織に属することのほとんどなかった作家たちが、そうした機会を持ちうる可能性はなかったといえよう。[35] 相手の置かれた状況についてほとんど知りえなかったということについては、亡命者も同じ立場にあった。しかし、亡命者の国内残留者に対する見方は、この時期を通じておおよそ好意的であった。

亡命の初期には、ドイツの詩人たちは、「ドイツから脱出しないかぎり、ドイツ文学という奴隷軍団に召集されている」と激しい非難を口にしたヘルマン・ケステンにしても、時間の推移とともに「沈黙を強いられている」詩人たちの存在を認めるようになる。[36] その間にはフォイヒトヴァンガー、ベッヒャー、ハインリヒとトーマス及びクラウスのマン兄弟父子などによって、国内残留者を亡命者と同じように反ファシズム、反ヒトラーの陣営に数えようとする見解が発表され、国内に向かって呼び掛けられてもいた。[37]

そのような亡命者の見解と国内残留者との連帯への呼び掛けを示す例として、当時モスクワで発行されていた雑誌「言葉」Das Wort の一九三七年四月号が、一九三五年四月ミュンヘン大学で行われたエルンスト・ヴィーヒェルトの講演を抜粋して掲載したことがあげられよう。(38)

それに付された「短いあとがき」には、当時の亡命者が国内に留まっているものたち、とりわけ詩人たちの発言をいかに待望していたかがうかがわれる。そしてかれらはこのヴィーヒェルトの講演に、これまでかたくなに沈黙を守っていたものたちの中から発せられた勇気ある言葉を、同時に声なき声を代理するものの声を聞いたのである。

しかし彼らは、それだけで満足していたのではない。亡命者たちが国内残留者に真に求めていたのは、その良心の声や良識のしるしだけではなかった。「われわれはこの講演のあるのを知ったいまとなっては、いっそう差し迫った気持ちで、ヴィーヒェルトのように考える人々と話し合えるようになることを望んでいる。あれこれのことを尋ねたいし、もしかしたらわれわれのほうでもいろいろと応えなければならないだろう」と「あとがき」にあるように、亡命者が求めていたのはドイツ国内において、たとえヒトラー・ナチ体制に積極的に抵抗することはなくとも、決してそれに肯じない、与することのない人々、ひそかにではあれ批判と反対の意志を抱いたものたちとの提携であり、連帯であった。だが、そうした連帯が単なる連帯感を越えた具体的な交流として成り立つための条件が、はたして存在していただろうか。すでにしてこの「あとがき」はその容易ならざることを暗示している。「あとがき」はヴィーヒェルトによる臆病な教養ある市民と学生、青年たちの道徳的、倫理的退廃への批判をそれなりに肯定的に受け入れながらも、こう付け加えてい

る。「しかしわれわれは、すでに見解を同じくしているだろうか、（疫病の蔓延している）湿地帯では、それ自体が干拓されないかぎり、腕利きの防疫専門家でさえ、人々を健康に保つことはできない、という点において。」[39] こうした呼び掛けは、たとえそれが第三帝国内に届いたとしても、国内残留者に重い負担を強いることになり、提携の実現はかえって困難になっただろう。

同じように、内と外との亡命の連帯の可能性を探っていたものにトーマス・マンがいるが、そのような亡命者側からの働き掛けにもかかわらず[40]、ヴィーヒェルトはもとより、他の国内の文学者たちは、国外に向かって声を上げようとはしなかった。そればかりか、ハンス・カロッサはハインリヒ・マンなどの国外における活動について不快感を示し[41]、一九四一年にナチによって設立された「ヨーロッパ著作家協会」の会長に就任した[42]。そうしたことが、それまで国内にある文学者に対して、亡命者たちが抱いていた期待を萎えさせ、彼らの間に不信と批判の念を増大させたのである。しかし、それでもなお、ベリィルントが指摘しているように、亡命文学者たちは国内の同僚たちと、かれらがナチでないかぎり、協調しようとしていたのである[43]。

(三)

世間はかれらの名前すらよく知らない
　かれらはただよう　暗く　明るく
帽子を頭からもぎとるようにして

人々はかれらにあいさつしようとする――だがかれらは見向きもしない
かれらはゆっくりとまた軽やかに歩む　嵐が吹き荒れ
かれはもう死んだのだと　不安な気持ちにさせられるものがある
だが生きている　盟約を交わした名の知られぬものたちが
隠れた一群の援助者たちが
拷問が脅かし　苦痛は激しい――
たたかいは迷うことなく続けられる
かれらこそ　来るべき人間の王国の
聖者であり　騎士なのだ(44)

「非合法活動家たち」と題された二節から成るこの詩は、国内に残って反ファシズム抵抗活動に従事したものたちを亡命者がうたったものである。この「非合法活動家」たちは「積極的」であれ、「消極的」であれ、なんらかの抵抗活動をしたものたち、主として労働者や組織に属していたものたちをさしていて、作家はその背後に隠れてしまっている(45)。亡命者たちは亡命初期の「この馬鹿騒ぎはおそらく長くは続くまい(46)」という見方から、この詩の書かれた一九三七年頃までには、「闘いは長い視野のもとで考えなければならない(47)」と思うようになっており、呼び掛ける相手を作家たちに限定せず、むしろドイツ国民一般、ことに戦闘的な労働者に変えていた。

ベリィルントによれば、亡命者たちは「国内亡命」という概念を二つの異なった意味において用いていた。まず活動的、非合法的抵抗、換言すれば積極的抵抗であり、次に間接的、隠れたプロテスト、あるいは沈黙への隠遁としての受身的抵抗すなわち消極的抵抗である。また同時に、後者は前者への移行段階として理解され、期待されていた。[48] しかし作家の抵抗を考える場合には、この区別はほとんど役に立たない。執筆禁止処分を受けたものは、その処分に異を唱えずにいたにしても、ナチに同調しないだけでも抵抗たりえたであろうし、仮に処分に逆らって創作活動——もちろんなんらかの形での発表を前提とした——を続けようとすれば、必然的に非合法となり、隠れたものにならざるを得ない。また作家としての活動を容認されていたものにしても、その活動に抵抗の姿勢を反映させようとすれば、非合法ではなくとも、間接的、暗示的なものにならざるをえない。作家、詩人に限定して「国内亡命」を考察するとすれば、彼らにおける「抵抗とは何か」が中心課題とならなければならない。

抵抗のレヴェルには、おおまかに言って、個人対個人、個人対組織、また組織対組織などが考えられよう。今ここで問題にしているのは、個人対個人のレヴェルでの抵抗ではない。もちろんヒトラー個人に対するなんらかの理由による個人による抵抗、あるいは批判、攻撃は考えられないわけではなかろう。だがヒトラー個人に対する攻撃に見える場合にしても、ヒトラーという個人は、彼の背後にあるナチ党という組織を支えている（しかしまた逆に彼自身がこの組織によって支えられてもいるのだが）思想なり、イデオロギーの体現者と見なされているにすぎない。六月二十日事件[49]に代表されるようなヒトラーに対する暗殺の試みなどがそれである。しかしその場合にもヒトラー個人に対する、たとえば、シュタウフェンベルク個人の攻撃とはいえまい。

彼が属する、たとえ彼が中心的役割を担っていたとはいえ、国防軍内部の反ナチグループの決断を彼が実行したにすぎない。つまりシュタウフェンベルク対ヒトラーという個人対個人レヴェルでの抵抗ではなく、組織対組織レヴェルでの、あるいは個人対組織レヴェルでの抵抗である。またヤン・ペータゼンの『われらの街』に描かれたような抵抗活動もそのようなものと言えよう。しかしたとえ組織の決定であれ、それを実行に移すには、それを実行すべき個人によるその承認と決断がなければならない。あるいは組織がなんらかの決定を下すためには、それ以前にその組織を構成する個人の、文字通り個人的な、決断が先行しなければならない。その決断は個人の思想、信条に基づいてなされるはずのものである。

いかなる政府、国家であれ、それが国民＝個人や、その集合体である政党などの様々な要求に、完全にとはいえずとも、対応し、その権力行使が通常の行政とそれに伴う必要最小限の域を出ず、社会の安寧秩序の保持と個人の幸福追求を保証し、基本的人権を侵すことがなければ、国民＝個人の側から政府に対する批判は別として、反政府的、反体制的行動が起こされることはないだろう。しかし、国家権力がそうした権力行使の則を越えないという保証はなくて、むしろ国家はその権力行使の範囲を常に拡大しようとする。ナチズムなどの全体主義による国家であれば、その権力拡大欲は無際限であり、むしろ全体主義はそれをこそその最大の特色としているといっても過言ではなかろう。全体主義は、たとえ自らと同質の思想、信条であれ、それがおのれの認可と保証の下に表明されるものでなければ、情容赦なく弾圧し、抹殺しようとする。(50) ましてやそれらの思想、信条がみずからのそれと異質であり、対立するものであれば、なおさらである。その時、つまり国家権力がその則を越えて、個人の基本的人権、思想、信条を侵そうとする時、あるいは日常的次元

で言えば、生活に必要な様々な物資が十分に供給されないなどの不満が限度に達した時、個人による反政府的行動への、国家権力行使に対する抵抗への決断は下される。それ故抵抗の起源は道徳的、倫理的判断にあると言えるだろう。

その判断に基づいた抵抗が顕在化し、積極的、攻撃的手段を用いる時、白バラ・グループの活動となり、さらには六月二十日事件となる。しかし他方その抵抗が潜在的なままにとどまることもあり、沈黙がその一形態でありうるだろう。

すでに本論のはじめにル・フォールの詩によって国内において沈黙させられたものたちの存在を指摘し、いままた沈黙それ自体が抵抗の一形式でありうることを示唆したが、沈黙が抵抗でありうる条件は何か、単にナチに同調しないということだけで、必要かつ十分でありうるのかをあらためて問わなければならない。

前述の戦後におけるトーマス・マンとの論争の中で、フランク・ティースは、みずからの第三帝国時代の態度を「国内亡命」と呼び、その意味について「われわれドイツ国内の亡命者が拠り所とした世界は、内面的領域であって、ヒトラーがいくら苦心したところでそれを侵すことはできなかった」[51]と主張した。この主張を契機にあらわれた「国内亡命者」による自己弁護的言辞によって、この概念乃至現象が、それまでとは違って、うさん臭いものに貶められ、以後の抵抗文学、亡命文学の研究に影を落とすことになったのだが、そのことよりも、ここで指摘しておきたいのは、ティースが何の留保もつけずに Innere Emigration を Innerer Raum を拠り所とした抵抗、すなわち Innerer Widerstand 内面的抵抗の意に用いていることである。

すでに見たように亡命者たちは、国内亡命 Innere Emigration を国内亡命者 Innerer Emigrant による国内における抵抗 Widerstand in Deutschland[52] と考えていた。他方 Innere Emigration は内面への亡命 Emigration nach Innen でもありえて、作家の場合にはその内面への亡命が、はたしてそのままティースの主張するような内面的抵抗になりうるかが問題なのである。[53]

「国内亡命」の定義に際しては、ほとんどすべての研究者によって、それが「抵抗」を意味するものとして扱われている。したがってある作家が、「国内亡命」に数えられるか否かは、もっぱらその作家の態度や作品が、「抵抗」を表すものであるかどうかによって判定される。そうした定義のうち、おそらくもっとも穏当であると思われるものを試みに挙げておく。

国内亡命の文学に数えられるのは、国外亡命の作家と同じく、その作者がナチ・イデオロギーの影響を受けず、人道主義的な作品を書き、ファシストの政策に同調しなかったものである。ドイツ国内の反ファシズム文学として理解されるのは、このような文学の一部であり、反ファシズム的抵抗の手段として、あるいは反ファシズム的態度の表現として一九三三年から四五年の間にドイツ国内で書かれたものである。ドイツ国内の反ファシズム文学は――抵抗文学とも呼ばれるが――国内亡命の文学を構成する要素であり、しかも――社会的機能から見て――もっとも能動的で有効な要素である。反ファシズム文学でありうるのは、非合法に配布された文書、また著者が「奴隷の言葉」で書いたが故に公刊されえた文学作品、また公刊の見通しや配布の意図なくして、獄中であるいはその後に、反ファシズム的態度の表現として、あるいはさらに抵抗や迫害を反映するものとして生み出された文学などである。反ファシズム文学は――著者の

世界観的立場によってであれ、また様々な生成条件によってであれ――必ずしも常にファシズムに対する的確で深い批判にはならずとも、ファシズムの本質、原理ないし現象形態と対立するものである。[54]

きわめて広義に、あるいは周到に解された国内亡命文学観を示したものと言えよう。これによれば、反ファシズム文学は、第一に「抵抗の手段」として「非合法」に配布されたものであり、第二に「奴隷の言葉」すなわちカムフラージュによって公刊されたもの、第三に「公刊の見通しや意図なくして」書かれたものをも含んでいる。しかし注意しなければならないのは、国内亡命文学すなわち反ファシズム文学＝抵抗文学ではないとされて、「ファシストの政策に同調しなかったもの」換言すれば「非ファシズム的」文学と、「反ファシズム的」文学を区別していることである。[55] もちろん前引部の直後で、ブレックレも認めているように、「非ファシズム的」文学と「反ファシズム的」文学の区別は容易ではない。

この点については、亡命者たちが戦後になっても国内亡命文学に対してかなり寛容であり、好意的であったのとは対照的に、戦後の研究者たちの中には非常に厳しい判断を下すものが少なくない。エルンスト・レヴィはゴットフリート・ベン、エルンスト・ユンガー、ハンス・カロッサに言及しながら、「非ナチであることと反ナチであることとは同じではなかった。非ナチであるものは妥協することも、それどころか一時的には煽動家たちの犠牲になることもあった。煽動家に侮辱されることも、カタツムリのように自分の殻に閉じこもることも、軍隊や『内面的亡命』に引きこもることもできた。(略)反ナチであったものは、亡命を選ばないかぎり、強制収容所行きが待っていた」[56]と言う。しかし「自分の殻に閉じこもる」ことで、自分以外に読者を持ちえない文を綴ることで、みずからの志を曲げることのなかったものもあるだろう。たしかに強

制収容所に入れられることと、たとえいかに苦痛ではあっても単に「亡命状態」を余儀なくされたこととは等置できない。しかしアルブレヒト・ハウスホーファーが『モアビター・ソネット』[57]を遺すことで、獄中の死の恐怖を克服し、みずからの生の確認をし、クレッパーは聖書を繙き、日記を綴ることで辛うじて志操を邪悪な力から守ったとすれば、前者を「反ナチ的」であり、後者を「非ナチ的」であると区別することにさしたる意味があるとは思えない。[58]

「非ナチ（非ファシズム）的」と「反ナチ（反ファシズム）的」を、別の観点から規定すれば、「消極的」と「積極的」ということになろうが、これについても同じことが言えよう。送り手である作家の側からすれば、積極的抵抗とは歴史的素材などによりナチ批判をカムフラージュした作品を書くことであり、時には直接的に現実の相貌を描き出すことであるだろう。[59] それにたいして消極的抵抗とは比喩であれ、カムフラージュであれ、特にナチ批判を含まずとも、ナチ的な声高な「血と土地」の讃美とは無縁なものを指し、その中には田園詩や自然叙情詩といったものが含まれる。[60] しかしそれらのいずれを選ぶかは、作家の抵抗の意志の強弱によるというより、むしろその作家本来の傾向や資質によるのである。[61] 自然叙情詩を専らにするものが、一見してそれとわかる抵抗詩を書くようにならなかったといってそれを批判しても無意味である。

受け手である読者の側からすれば、積極的抵抗とはせいぜい非合法文書や作品を読んだり、複写してさらに配布することであろうが、それとても直接行動による抵抗に比べれば消極的でしかない。[62] したがって「非ナチ的・反ナチ的」であれ、「消極的・積極的」であれ文学的抵抗をそうした分類によって評価することが、その理解をより正確なものとし、深めてくれるとは思えない。[63] 弁明に惑わされない注意は当然必要であるが、

そしてそのためには問題の事柄から距離を置くことも必要であるが、しかしより必要なのは事柄に接近しつつ冷静に眺めること、不可能なことを承知で言えば、できるだけその時代の雰囲気の中に身を置いて考えることではなかろうか。

唐突に奇妙な例を挙げるが、日本のある随筆家がその戦時中の日記で次のようなことを書いている。「相手が軍だから、さくらを切るか切らないかという主題はどうかすると軍を諷したようにとられると大変だ。桜の樹が成長して他の庭木が日陰になり、主人公が悩まされる件なども、あまり軍費をかけすぎて人民が苦しむ、という風にとられると困る」[64]。この著者徳川夢声は、「ただユーモア小説」を書こうとしているだけで、「桜」を「軍」に、「庭木」を「人民」になぞらえようなどとはしていない。しかし特に反戦的でも、また軍人嫌いではあっても、反軍的であったとは思われない役者兼業の随筆家夢声でさえ、そううけとられかねないことを心配しなければならない。

この例が当面の筆者の課題と関わりを持つのは、この文章がいまのわれわれには何の変哲もないこととおもわれるような一語や描写、あるいは作品を、それが生み出された時代の雰囲気の中に置いてみれば、その時代なりの意味を持ちうることを示唆しているからである[65]。いまならナチ的と思えるようなことすらも、その時代の環境の中でなら「奴隷の言葉」を用いた、あるいは相手の武器を逆にとった非ナチ的、反ナチ的なメッセージを含んでいるのかも知れない。あるいはまた夢声が恐れているように何の他意もないものが、何らかの意図を含んだものと受け取られることもあるだろうし[66]、逆に著者の意図したものが読者には伝わらないこともありうるだろう。

ベルゲングリューンの作品が、この点に関しては興味ある例を提供している。彼の『大暴君と審判』をナチ党機関紙「民族の監視兵（フェルキッシャー・オーバハター）」は「ルネッサンス時代の総統小説（フューラーロマーン）」と呼んで推奨したが、読者が歴史的カムフラージュによる現実批判と受けとめていることがわかった時点で、ようやく禁止された。著者の意図を一般読者は正しく受けとめたが、検閲当局は、ナチ行政機関内の様々な事情もあって、はじめはそれを見抜けず、素早く対応できなかったのである。[67] このベルゲングリューンの例に見られるように、受け手である読者はカムフラージュによって秘匿された作者の意図を十分に掬みとるだけの力を持っていたと言われている。[68]

しかし仮に作者の意図が伝わったとしても、それが読者に及ぼす影響、効果は何であったのか、先のブレックレの定義の中にも、「社会的な有効性」に言及されていたが、そもそもそうした働きが期待できたのか。これにも肯定、否定相対立する見解がある。否定的なものとしては、たとえば「積極的で国民を教育するような効果は『国内亡命作家』の作品からは生まれなかった」という見方が挙げられる。[69] しかし、他方国内亡命作家を代表する一人に数えられるラインホルト・シュナイダーは、第三帝国時代に「アンチクリスト」などの多くのナチ批判的なソネットを書いたが、[70] そのうちのひとつ、これもよく知られた「祈るものにのみ」と題する一編について、一九四八年に次のような証言がある。「この詩は説教壇で語られ、塹壕やスターリングラードの孤立した陣地でも読まれた（略）この詩が当時それほど急速になかば秘密裡に広まったのは、もっぱらそこに新しい強烈な体験が、つまり祈りがあの時代の悪魔的な力に対抗しうるという体験が言い表されていたからである。[72]」このことは作者の伝えようとすることが読者に十分に伝わっていたことを示している。それはただ慰めを与えたにすぎず、国民を反ナチ的行動に立ち上がらせることはなかったかもしれない。

シュナイダーのソネットやベルゲングリューンの詩編『怒りの日』[73]などがそうした社会的な効果を持つことはなかったにしても、それだからといって彼らを含む国内亡命作家が第三帝国に許容されていたのは、「新しい国家に対し、またその文化政策に対してなんの危険もない、というのもこれらの作家たちの作品は形式的にも、内容的にもナチズムの思想にとって深刻なものではないからである」[74]とはならないだろう[75]。

文学的抵抗のもたらしうる社会的、政治的効果を測定しうる手だてが、そもそもあるとは思われない。ある作家なり作品が、読者にいかなる影響を及ぼしたかを尺度として、その作家なり作品なりが反ファシズム的であるか否か、ナチに同調的であるか、ナチ補完的であるかなどを判断しようとするのは、抵抗文学、ことに国内亡命文学を抵抗文学として考察する際には無意味である。

そうした判断はしばしばその判断を下す側のイデオローギッシュな立場に左右され勝ちであり、レヴィによる「非ナチ・反ナチ」などの区別も、彼自身が指摘しているように、第三帝国時代の問題であるよりも、その後の問題、主として戦後の作家の責罪論、戦争責任論に関わることである。トーマス・マンに代表されるような戦後における国内亡命者にたいする反発と非難は、まさにその点に向けられていたのである[76]。

戦後アメリカ兵としてドイツに入ったクラウス・マンは記している、「ナチスは、ドイツには全くいなかったということが、今や明らかになりました(略)『国内亡命』ばかりです……。」[77]しかし、第三帝国時代に実際に何らかの抵抗を行ったものたち、あるいは沈黙を強いられたものたちは、ベルゲングリューンにしろ、シュナイダー、ランゲッサー、ヴィーヒェルトにしろ、みずからの身の処し方を戦中戦後を通じて「国内亡命」あるいは「内面への亡命」とは呼んでいない。それどころか「内面的抵抗」さえ文字通りには主張して

いないことは注目されていい。バルラハやクレッパーがそうした言葉を用いたのは、すでに見たように、第三帝国時代のことであり、しかもそれは「国内にありながら亡命者と同じような状況」を強いられていることを表したにすぎなかった。ハインリヒ・マンが指摘したように「バルラハにその気がありさえすれば」ナチの正体を「自分の体験から人々に解き明かすことも」[78]できたかもしれない。またユダヤ人である妻子を強制収容所から守るためにではあれ、ナチの高官とすら交渉を重ねたクレッパー[79]は、抵抗とも批判とも無縁だったといえるかもしれない。しかし彼らは「恥ずべき名声」を享受することなく、志を曲げることもなかった。彼らがナチ体制の崩壊を迎えることができたら、彼らも「国内亡命」を主張したかどうかは想像の域を出ない[80]。

いずれにせよ、ランゲッサーが不快の念を示したのは、彼らに対してではなく、トーマス・マンが言ったように、「この十二年間がなかったもののごとく」[81]振る舞ったものたち、検閲当局に見る目があれば、自分の文学は彼らの世界観を拒否するものであることがわかったはずだ、と臆面もなく主張するものたちだった[82]。彼女は亡命者も国内亡命者も文学者、詩人であるかぎり、共通の故郷を持っていて、そこではどちらがどちらより優れているかなどという「優越論争」は無縁のことだと言う。詩人の共通の故郷とは言葉であって、ナチによってその言葉が「誤用され、辱しめられ、空虚なものにされ、貶められ、似非詩語にされた」[83]時代に、真に詩人に残された可能性は、それらの概念を放棄し、その損失によってかえって予期しなかった「本質的な深み」を獲得すること以外にないと言う。

「国内亡命」の「亡命」を、バルラハやクレッパーの場合のように考えるなら、ティースやモーロはもと

より、ル・フォール、ベルゲングリューン、シュナイダー、あるいはヴィーヒェルトもそれには含まれない。クレッパーですら、結局は出版を許可されたのだから、その点にかぎっていえば、「亡命」とはならないだろう。しかし、「亡命状態」を強制された作家が向かうべき所はどこなのか。国外に亡命した作家が、たとえ周囲にドイツ語が通じないような状況にあってもなお、いやかえってそれだからこそといえるかもしれない、詩作を続けたように[84]、「国内亡命」させられたものにとっても、言葉の世界と絶縁することはなかったはずで、その場合彼が向かう所、身を置くべき所は、まさに内面世界、精神の深み以外になかったはずである。その意味では、前述のティースが主張した「ヒトラーさえ侵しえなかった内面の領域」は、彼にそれを云々する資格があるか否かを別にすれば、たしかに存在したと言えよう。

抵抗がその起源を、先に触れたように、「道徳的、倫理的判断」に持ち、積極的、攻撃的抵抗の極致が武器をとってのそれであるとすれば、消極的、防衛的抵抗の最後の砦は内面世界、精神の深奥であり、詩人、作家にとっては、ランゲッサーにならって言えば、言葉という故郷である。

たしかに「沈黙はただちに抵抗を意味するものではない[85]」が、沈黙を強いられたものとて、詩人であるかぎり、その故郷を離れられないはずであり、汚された言葉の新たな深みを探求し続けるに違いない[86]。その営みが続けられるかぎり、詩人はその故郷をヒトラー独裁によって狭め続けられるなかで、「最後の結晶、最後の原石たる自己自身」に向けられた試練に耐えうるのである。その時沈黙を強いられたものの沈黙は、精神を拠り所とした抵抗であり、「内面への亡命・精神への亡命」は、「内面の抵抗・精神による抵抗」と呼びうるのである。(完　一九八六・三)

追記　右は一九八四年以来の、故松俊夫教授との共同研究「ドイツ第三帝国と反ファシズム抵抗活動」等に対して与えられた成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。

〔注〕

引用、言及した詩の原文は最後に補注として一括して掲げた。

(1) Innere Emigration と表記されるこの語については、その定義ないし概念規定によって、内的亡命、精神的亡命などと訳される。筆者は Innere Emigration の inner, Emigration nach Innen の Innen を「精神的」あるいは「精神的領域」と解しているが、それでは inner, Innen の示唆するもうひとつの意味、「国内」が欠落する。小論ではより慣用的な「国内亡命」を主として用いるが、時に応じて両者を使うことをお断りしておく。ここでは便宜上「国内亡命」という表記を用いることにする。

(2) Charles W. Hoffmann, Opposition und Innere Emigration: Zwei Aspekte des „Anderen Deutschlands". In: Hohendahl u. Schwarz, Exil und Innere Emigration II (注3) S. 126.

(3) Peter Mertz, Tarnung und Widerstand. In: Und das wurde nicht ihr Staat. Verlag C. H. Beck, München, 1985, S. 68.

なお、本文中に引用、言及したものを中心にして、いくつかの文献を挙げておく。

(a) R. Grimm u. J. Hermand (Hrsg.), Exil und Innere Emigration. Third Wisconsin Workshop. Athenäum Vlg., Frankfurt/M., 1972. (b) P. U. Hohendahl u. E. Schwarz (Hrsg.), Exil und Innere Emigration II. International Tagung in St. Louis. Athenäum Vlg., 1973. (c) Ralf Schnell, Literarische Innere Emigration 1933–1945. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1976. (d) Gisela Berglund, Einige Anmerkungen zum Begriff der „Inneren Emi-

gration." Stockholmer Koordinationsstelle zur Erforschung der deutschsprachigen Exil-Literatur. Stockholms Universität, Deutsches Institut, 1974. これは後に G. Berglund, Der Kampf um den Leser im Dritten Reich (注34) に収められた。(e) Walter A. Berendsohn, Innere Emigration. Stockholms Universität (?), 1971. (f) Charles W. Hoffmann, Opposition Poetry in Nazi Germany. Berkeley and Los Angels, 1962. (g) H. R. Klienenberger, The Christian Writers of the Inner Emigration. Mouton, The Hague & Paris, 1968. (h) Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.), Deutsche Literatur im Exil 1933-1945. Bd. I: Dokumente. Bd. II: Materialien. Athenäum Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt/M., 1974. また邦語文献としては祝中、山本 丈「アンガージュマンとアウトノミー」――ナチ時代の「国内亡命」の問題をめぐって――ドイツ文学論集 神戸大学。同「情況の中の文学」ナチ時代の「国内亡命」という奇妙な概念。現代思想 一九七四年七月。

(4) Gertrud von le Fort, Lyrisches Tagebuch aus den Jahren 1933 bis 1945. In: Gedichte. Insel-Verlag, Wiesbaden, 1958. なお補注Ⅰ―Ⅲ、参照。

(5) 三三年から四五年の期間に限定すれば、エッセイ「永遠の女性」Die ewige Frau,「マグデブルクの婚宴」Die Magdeburgische Hochzeit,「犠牲の炎」Die Opferflamme,「海の裁き」Das Gericht des Meeres などが出版され、長編「ヴェロニカの聖布」Das Schweißtuch der Veronika の第二部「天使の花冠」Kranz der Engel が脱稿していた。また彼女は三〇年代前半にはドイツ、スイスに講演旅行をおこなうこともでき、三五年には最初のル・フォール論も発表されているが、三八年以後ナチ的文学史では無視されるようになった。Gisbert Kranz (Hrsg.), G. v. le Fort. Leben und Werk in Daten, Bildern und Zeugnissen. Insel Verlag, Frankfurt/M., 1976.

(6) Elisabeth Langgässer, Schriftsteller unter Hitler Diktatur. In: Ost und West. Beiträge zu kulturellen und politischen Fragen der Zeit. Hrsg. v. Alfred Katorowicz. Heft 4/1947. S. 41. auch In: H. L. Arnold (Hrsg.), Deutsche Literatur im Exil 1933-1945. Bd. I (注3) S. 280-285.

(7) Ernst Barlach, Als ich von dem Verbot der Berufsausübung bedroht war. In: E. Barlach, Die Prosa II. Hrsg. v. F. Droß, Piper Verlag, München, 1959. この文の日付は一九三七年七月二十九・三〇日となっている。バルラハは一九三七年七月八日付の「可及的速やかにみずからアカデミーからの脱退を表明せられたい……」というアカデミーからの要請に対して、同月十一日脱退を表明した。Hildegard Brenner, Ende einer bürgerlichen Kunst-Institution. Die politische Formierung der Preußischen Akademie der Künste ab 1933. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1972. S. 143f. バルラハとナチの文化政策に関しては、Ernst Piper, Ernst Barlach und die nationalsozialistische Kunstpolitik. Eine dokumentarische Darstellung zur „entarteten Kunst." Piper, München, 1987. 及び Ernst Barlach, Werk und Wirkung. Berichte, Gespräche, Erinnerungen. Gesammlt. u. Hrsg. v. Elmer Jansen, Athenäum Verlag, Frankfurt/M., 1972.

(8) Jochen Klepper, Unter dem Schatten Deiner Flügel. Aus den Tagebüchern der Jahre 1932–1942. Hrsg. v. H. Klepper. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1956. S. 69. am 10. Juni '33. これには抄訳であるが、小塩節、小畑千代訳『みつばさのかげに——愛と死の日記』日本基督教団出版局 一九七七年がある。ほかにいくつかの作品をあげれば、Der Vater. Roman eines Königs (erstmals erschien 1937 mit dem Untertitel, Der Roman des Soldatenkönigs). Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1977.; Überwindung. Tagebücher und Aufzeichnungen aus dem Kriege. Hrsg. v. Hildegard Klepper. Evangelische Buchgemeinde, Stuttgart, 1958.; Kyrie. Geistliche Lieder (1938). In: Ziel der Zeit. Die gesammelte Gedichte. Eckart Verlag, Witten u. Berlin, 1962.; Briefwechsel 1925–1942. Hrsg. v. E. G. Riemenschneider. Deutscher Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1973. 生い立ちや第三帝国時代の彼の活動については J. Klepper. Dichter und Zeuge. Ein Lebensbild gestaltet von Ilse Jonas. Evangelische Verlagsanstalt, Berlin, 1966.; H. R. Klienenberger (注3) S. 81–107.

(9) J. Klepper, Unter dem Schatten Deiner Flügel (注3) S. 121 f, am 8. Nov. '33. 当時作家連盟 Schriftstellerverband に加入していないものは出版用紙の配給が受けられなかった。なおクレッパーがここで Schriftstellerverband と記しているのは、Reichsverband Deutscher Schriftsteller ドイツ文筆家連盟のことである。これは Reichskulturkammer 全国文化院に所属する Reichsschrifttumskammer 全国著述院の下部機関である（上記の訳語は、小林良正『新独逸政治・経済語彙』日光書院 昭一七年によった）。

右の日記から三三年から三七年の四年間におけるクレッパーの境遇と作品『父』についての記事をごくおおまかに拾い出して見る。三三年九月二日、彼を民族の詩人、風土に結び付いた詩人として称賛する批評家が現れる。同十三日『父』の着想。三四年二月二十四日、全国著述院に入会を認められる。同三月二十二日、全国著述院入会のために新国家を支持する保証書に署名したが、決して空手形ではない旨を記している（ただし署名したのがこの日なのか、もっと前のことなのか不明）。三五年九月三日、出版社から近々全国著述院から追放されることを予期しておくように伝えられる。三六年十一月二日、『父』完成。三七年二月二十二日ゲッベルスがユダヤ人と姻戚関係にあるものは全国著述院に所属できないと演説。同二十四日『父』出来上がり、本が届く。同年三月二七日、除名を通告される。しかし特別許可がありうることを期待。四月十六日、全国書籍商組合の広報紙に除名が公表されるが、なお特別措置の希望を捨てない。九月十四日国防省が『父』を軍に推奨している。

(10) Josef Wulf, Literatur und Dichtung im Dritten Reich. Eine Dokumentation. Ullstein, Frankfurt/M., 1983. S. 23. 三三年三月十四日付の会員でありつづけるか否かを問う文書。Sind Sie bereit, unter Anerkennung der veränderten geschichtlichen Lage weiter Ihre Person der Preußischen Akademie der Künste zur Verfügung zu stellen? Eine Bejahung dieser Frage schließt die öffentliche politische Betätigung gegen die Regierung aus und verpflichet Sie zu einer loyalen Mitarbeit an den satzungsgemäß der Akademie zu fallenden nationalen kulturellen Aufgaben im Sinne der veränderten geschichtlichen Lage.

(11) しかしクレッパーは、シュナイダーが「政府の文化政策の故に全国著述院によって自分の仕事が顧みられないことについて、無視されることこそ今日与えられる最良の境遇なのだ」と語ったことを記している。J. Klepper, Unter dem Schatten Deiner Flügel (注∞) S. 253. am 28. 4. 1935.

(12) le Fort, Vorrede zu einem Leseabend in St. Gallen 1938. Manuskript の中に、„die Stimme jenes tieferen Deutschland hören, das es auch in den dunkelsten Tagen unserer Geschichte gab,“. とある。Ausstellungskatalog der städt. Volkshochschule Fulda, 1978. S. 32.

(13) le Fort, Vom Wesen christlicher Dichtung. In: Aufzeichnungen und Erinnerungen. Benziger Verlag, Zürich, 1956. S. 46. なおル・フォールはこの引用の直後に Was unsterblich im Gesang soll leben/Muß im Leben untergeh'n・・・という Friedrich Schiller の Griechenland からの一節を引用している。

(14) ル・フォールはそのような作品を数多く発表している。この時期のものでいえば、『海の裁き』のアンヌ・ド・ヴィトレ、『ヴェロニカの聖帛』のヴェロニカなど。

(15) le Fort, Lyrisches Tagebuch (注4) 補注1—Ⅱ。

(16) 亡命文学者デーブリーンに次の言葉がある、「政治的に強制同化が行われている間は、すべての文学は亡命状態にある。帝国領内においても文学は亡命文学という形態のうちにある。即ち隠された非合法的なものとして。(略) 戦時においては文学の女神ミューズは沈黙する。亡命者とは第三帝国で禁止されているということである。」A. Döblin, Die deutsche Literatur [im Ausland seit 1933]. Ein Dialog zwischen Politik und Kunst. In: Arnold Bd. I (注∞) S. 200-218.

(17) Die Bücherverbrennung. Zum 10. Mai 1933. hrsg. v. G. S. Sauder, Carl Hanser Verlag, 1983. S. 247. 他に、Th. Friedrich (hrsg.), Das Vorspiel. Die Bücherverbrennung am 10. Mai 1933: Verlauf, Folgen, Nachwirkungen. Eine Dokumentation. LitPol Verlagsgesellschaft/Berlin, 1983.; H. Haarmann u. a. (hrsg.), »Das war ein Vorspiel nur…«. Bücherverbrennung Deutschland 1933: Voraussetzungen und Folgen. Aussstellung der Akademie der Künste vom

8. Mai bis 3. Juli 1983. Medusa, 1983. など。また Weimarer Beträge 29 (1983) 5 に関連した論文が数編掲載されている。

(18) H. Brenner, Ende einer bürgerlichen Kunst-Institution (注7) S. 27-31. さらに H. Mann, Ein Zeitalter wird besichtigt. Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbeck bei Hamburg, 1976. S. 237.

(19) 注10参照。

(20) J. Wulf, Literatur und Dichtung・・・(注10) S. 26.

(21) H. Brenner, Ende・・・(注7) S. 27.

(22) Dietrich Aigner, Die Indizierung 》schändlichen und unerwüschten Schrifttums《 im Dritten Reich. Sonderdruck aus dem 》Archiv für Geschichte des Buchwesens》, Bd. XI, Lieferung 3-5. Buchhändler-Vereinigung GmbH. Frankfurt/M., 1971, Sp 987.

(23) Oskar Maria Graf, Verbrennt mich! In: Exil. Literarische und politische Texte aus dem deutschen Exil 1933-1945. Hrsg. v. Ernst Loewy. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1979. S 196f. (zuerst erschien in: Wiener Arbeiterzeitung, am 12. 5. '33.)

(24) ル・フォールは一九三四年に詩人たちに要請された総統への讃歌を書かなかった。G. Kranz, G. v. le Fort (注5)、S. 24.

(25) この語句の背後には、ルダーリーンの詩「ドイツ人の歌」Gesang des Deutschen がある。Lyrisches Tagebuch の一にはルダーリーンの名が挙げられ、「ドイツ人の歌」からの引用が織り込まれ、その「汝、愛の国」はこの語句に直接結び付いていると言えよう。補注1—I・II及び3参照(ただし「ドイツ人の歌」ははじめの三節のみを挙げた)。

(26) le Fort, Lyrisches Tagebuch (注4)、補注1—IV。

(27) le Fort, Die Vertriebenen. In: Gedichte (注4) S. 43. ただしこの主題でまとめられた三編からなる詩編は Die Emigranten と題されて „Lieder und Legenden" (Fritz Eckart-Verlag, Leipzig, 1912) に収められた連作詩からとられたものである。Eleonore von la Chevallerie (zusammenge-

tellt), G. v. le Fort. Ausstellung in der Universitätsbibliothek Marburg vom 26. Jan. bis 6. März 1983. Schriften der Universitätsbibliothek 15. S. 58. 補注2。またル・フォール家の先祖については Hälfte des Lebens. Erinnerungen. Ehrenwirth-Verlag, München, 1956. 及び Woran ich glaube und andere Aufsätze. Verlag der Arche, Zürich, 1968. など参照。

(28) この論争をまとめたものとしては次の二点があるが、いずれも筆者未見である。Die große Kontroverse. Ein Briefwechsel um Deutschland. Hrsg. u. bearbt. v. J. F. G. Grosser. Hamburg, Nagel, 1963.; Th. Mann, F. Thieß, W. v. Molo, Ein Streitgespräch über die äußere und die innere Emigration. Dortmund, Druckschriftenvertriebsdienst. ohne Jahresangabe (Ende 1945 od. Anfang 1946) 筆者が参照したのは Arnold Bd. I (注3) に収録されたものである。以下要約した引用はこれによっている。

(29) のちに W. Berendsohn はこのティースの態度に国内残留者を亡命者より優越させようとする姿勢を見いだし、激しく非難した(W. Berendsohn, Innere Emigration〔注3〕)。ただしベーレントゾーンの主張の力点は „Innere Emigration" を文芸学用語としては排除することに置かれていて、彼がドイツ国内にとどまったものすべてに対して否定的であったのではないことは、彼がすでに亡命中に書いていた „Humanistische Front Teil I" においても明らかである。さらに戦後書き終えられたその Teil II. において、国内と国外の亡命の間の共通の核として Idee der Humanität を認め、Innere Emigration と das andere Deutschland を包括する用語として „Das unterdrückte, das heimliche Deutschland" を提言している。Die humanistische Front. Einführung in die deutsche Emigranten-Literatur. Erster Teil; Von 1933 bis zum Kriegsausbruch 1939. Europa Verlag, Zürich, 1946 (abgeschlossen 1939): Zweiter Teil; Vom Kriegsausbruch 1939 bis Ende 1946. Verlag Georg Heintz, Worms, 1976 (abgeschlossen 1949).

(30) このマンの「血と汚辱」Blut und Schande という非難に対しては、Wilhelm Hausenstein が Bücher・・・frei von Blut und Schande. Ein Wort an Thomas Mann. Süddeutsche Zeitung Nr.

24. am 24. Dez 1945 において R. Schneider, W. Bergengruen, le Fort, Karl Voßler などの名を挙げて反論した。

(31) Arnold Bd. I (注3) に収められた A. Bauer, A. Abusch, E. Langgässer, A. Kantorowicz などを参照。

(32) Klaus Mann, Brief an Gottfried Benn. Le Lavandou, den 9. 5. 33. In: Prüfungen. Schriften zur Literatur. Hrsg. v. Martin Gregor-Dellin. Nymphenburger Verlagshandlung, München, 1968. S. 175ff. なおこの書簡は本書に付された注によれば (S. 367) オリジナルは入手不可能であり、ベンによってその著作集 (Gesammelte Werke in vier Bänden. Hrsg. v. Dieter Wellershoff. Limes Verlag, Wiesbaden, 1961, 66. 邦訳には、山本尤他訳、ゴットフリート・ベン著作集 全三巻 社会思想社 一九七二がある) の第四巻 (邦訳では第一巻) に収録されている自伝的手記 Doppelleben「二重生活」に公表されたものによっているという。「二重生活」は一九五〇年に発表されたものであるが、その中でベンはクラウスの書簡について以下のようなコメントを付している、「この手紙を今日十五年ぶりに読み返してみて、まったく呆然とさせられた、この二十七歳の青年の状況判断は私 (当時四十七歳—筆者注) より正しく、物事の進展を正確に予見し、より明晰に考えていた、私の返事はそれにひきかえロマンティックで感情的で、もったいぶったものだった」S. 74.

(33) G. Benn, Antwort an die literarischen Emigranten. In: Gesammelte Werke (注32) Bd. 4, S. 239-248. ベンの回答は様々な問題に言及しているが、ここではそれらに立ち入ることはしない。詳しくは斎藤佑史『二重生活』におけるゴットフリート・ベンの反省と弁明について。東洋大学工学部 昭和五十五年教養課程研究報告を参照。またクラウスはこのベンの回答に対して Gottfried Benn oder Die Entwürdigung des Geistes を自分が編集する亡命者の雑誌 Die Sammlung I. Jahrg. 1. Heft, Sept. '33 に発表し、さらに一九三七年にモスクワで発行されていた雑誌 Das Wort 2. Jahrg. Heft 9, Sept. '37 に Gottfried Benn. Die Geschichte einer Verwirrung を発表している (K. Mann, Prüfungen, S. 178-192). なおベンは後にはナチ的思想と離れ、軍務に就く(軍医)が、それを eine

aristokratische Form der Emigrierung とよんだ（R. Schnell〔注3〕S. 3 による）。

（34）開戦以前には国外で発行されていた亡命者の雑誌などを国内で読むことも不可能ではなかったようである。ハンス・カロッサは三三年八月二十六日付手紙で「小クラウス・マン」の「亡命者新聞」（実際は雑誌。注33参照）をなんとか読みたいと言い、同年十一月四日付の手紙ではこの雑誌の第一号を読んだ印象を「これは恐ろしいほど愚かなものです。ことにハインリヒ・マンがそこで書いていることは彼のために恥ずかしいと思われるくらいのものです」と記している。もっともこの手紙はイタリアから発せられているので、彼は雑誌をそこで入手したのかもしれない Hans Carossa, Briefe 2. Hrsg. v. Eva Kampmann-Carossa. Insel Verlag, 1978. S. 296, S. 510. 勿論ナチ側は国内の文学者の動向ばかりではなく、亡命者の国外における反ナチ的言動に神経をとがらせていて、その御用雑誌で常に彼らを攻撃し、読者に警告を発していた。これらについては Herbert E. Tutas, NS-Propaganda und deutsches Exil 1933-1939. Georg Heintz, Worms, 1973.; Gisela Berglund, Der Kampf um den Leser im Dritten Reich. Die Literaturpolitik der „Neuen Literatur"（Will Vesper）und der „Nationalsozialistischen Monatshefte", Georg Heintz, Worms, 1980.

（35）一九三五年六月パリで開催された「文化擁護のための国際作家会議」の四日目にドイツ国内から参加し、匿名のまま黒メガネをかけて演壇に上った Jan Petersen が、パリで発行されて、ひそかにドイツ国内に持ち込まれた亡命者の雑誌で、ハインリヒ・マンなどの論文に接することができたのを述べているのは、むしろ例外的なものと言えよう（ペーターゼンは当時ドイツ・プロレタリア革命作家同盟の主要メンバーであり、この会議後そのまま亡命した）。Paris 1935. Erster Internationaler-schriftstellerkongreß zur Verteidigung der Kultur. Reden und Dokumente. Mit Materialien der Londoner Schriftstellerkonferenz 1936. Einleitung und Anhang von Wolfgang Klein, Akademie-Verlag, Berlin. 1982. なお抄訳の形であるが小松清編『文化の擁護』第一書房 昭和十年がある。国外で印刷された文書の第三帝国内への持ち込みについては、たとえば Werner Herden, Streitschriften im Tarngewand. Zur antifaschistischen Publizistik Heinrich Manns. In:

Marginalien. Zeitschrift für Buchkunst und Bibliophilie. Hrsg. v. Pirkheimer-Gesellschaft. 45. Heft, 1972. S. 1-5. またドイツ国内での非合法グループの活動については Jan Petersen, Unsere Straße. Eine Chronik. Geschrieben im Herzen des faschistischen Deutschlands 1933-34. Pahl-Rugen, Köln, 1983. 及び長橋芙美子『言葉の力で――ドイツの反ファシズム作家たち――』(新日本出版社　一九八二) に収められた「国内の抵抗文学――プロレタリア・革命作家同盟非合法グループのこと」、さらに (注52) の文献を参照。

(36) Hermann Kesten, Die Literatur und das Dritte Reich (1934) 及び Fünf Jahre danach (1938). In: Der Geist der Unruhe. Literarische Streitzüge. Deutscher Bücherbund, Konstanz, 1959.

(37) Innere Emigration の語の起源及び概念の変遷、国内亡命者に対する亡命者の見解の推移については (注3) に挙げた Gisela Berglund, Einige Anmerkungen・・・が詳細に跡付けている。以下主としてこれによりながら本文に名を挙げた文学者たちの見解を簡単に紹介しておく。

(a) Lion Feuchtwanger, Die Geschwister Oppenheim. Querido Verlag, Amsterdam, 1933. S. 397-8.「あなたが正確に知りたいとおっしゃるなら、『我々』というのは番号だったと言って置きましょう (略)、たとえばわたしは Nr. CII 743 でした。国内での啓蒙活動が問題なのです。国内での役割とはそういうものです。難しいことですよ、国内亡命は。レストランやホテルで生活し、毎夜寝場所を変え、いつも警察がつけまわしている (略)」。ベリィルントはこの引用に「ここでは国内亡命は国内における積極的抵抗として理解されているようである」と付言している。なおこの作品は一九三三年以来たいていの版で Die Geschwister Oppermann と変えられ、現在ではその名によって出版されている。またベリィルントが挙げている発行年次は一九三四年であるが、筆者の披見しえたのは一九三三年版である。この作品については、Gisela Berglund, Deutsche Opposition gegen Hitler in Presse und Roman des Exils. Almquist & Wiksell, Stockholm, 1972. S. 133-142. また邦語文献としては、高村宏「亡命期のフォイヒトヴァンガー (I) (II) (III)」ドイツ文化　中央大学　第二七、二八、二九号がある。

(b) Klaus Mann, Der Vulkan. Roman unter Emigranten. edition spangenberg, 1977. S. 543 u. S. 545. (zuerst erschien, Querido Verlag, Amsterdam, 1939).「あなたがたをドイツからへだてている国境は越えられない。そのむこうはあなたがたにとって呪わしい土地、悪い夢の中で連れていかれるだけ、だがそこにも人々が生きている、多くは苦しみ、故郷にいながら故郷を失い、『国内亡命』と呼ばれている」、また「二本の線が、力に満ちた二本の線が並行して走っている。内と外との亡命の力がいまや結び付こうとしている。一つになってそれらは働くべきなのだ。」ベリィルントはこのような国内亡命を「ひそかな間接的抵抗」としているが、はじめの引用にみられるそれは、さきに触れたバルラハやクレッパーの例を思わせよう。そこにはたしてたとえ「間接的」であれ抵抗の姿勢を見いだせるかどうかは問題がある。しかし後の引用によれば国内亡命と亡命とがほぼ等置されている。したがってクラウス・マンはベリィルントが言うように、登場人物が亡命を決心する時にはじめて「積極的抵抗」に変化する体のものとは考えていないで、国内亡命にも、それ自体で亡命に等しい抵抗あるいは拒否の姿勢を見ているのではないか。そうしたクラウスの見方におそらく影響を与えたのが伯父のハインリヒ・マンの統一戦線、人民戦線構想（構想と言えるようなものがハインリヒにあったかどうかを考察の外に置けば）であり、父のトーマスの考え方であったと思われる。なお G. Berglund, Deutsche Opposition・・・S. 153–161.

(c) Heinrich Mann, An den Kongreß der Sowjetschriftsteller. In : Verteidigung der Kultur. Claassen, Hamburg, 1960. S. 94f. この会議は一九三八年八月に行れ、このメッセージは Internationale Literatur, Moskau, 1934, Nr. 4 に発表された。ここでハインリヒは「反ファシズム的文学者とは自分の任務をファシズム政府による恩恵を目当てにではなく、成果を目指して行ったものであり、（略）反ファシズムは必ずしも意図して反ファシズムである必要はなく、良心の自由を堅持することによってそうなるのである。（略）ドイツ国内に留どまっている若干の人たちをも含む亡命文学は、平常の文学的水準より良いものになりつつある」と述べ、また Aufgaben der Emigration. (In : Verteidegung・・・S. 16) でも、亡命は「沈黙した国民の声であり、全世界に対してそうでなけ

ればならない」とも述べている。彼が国内亡命という語を使っていないにせよ、内と外との連帯を求めていたことはたしかである。

トーマス・マンは「国内にいる多くのものにとっても祖国は我々にとってと同じように疎遠なものになってしまっている、何百万という『国内亡命者』が彼地で終わりを待ちわびている」と言っている(zit. nach Berglund, Einige Anmerkungen・・・〔注3〕S. 61)。ただし「何百万」という数が示すように、マンがここでそう呼んでいる「国内亡命者」は作家や文学者に限定されたものではなく、ドイツ国民全体を指している。

(d) Johannes R. Becher は一九四一年に第三帝国内の「文学者たち」に国内において沈黙し、その静寂のうちに偉大な自由の嵐を準備するように呼びかけたという。Berglund, Einige Anmerkungen・・・(注3) S. 12.

(38) Ernst Wiechert, Ansprache an die Münchener Studenten. In: Das Wort, Literarische Monatsschrift, 2. Jg. 1937, H. 4/5, S. 5-11. この掲載論文のもとになった講演の本来の題は Der Dichter und seine Zeit となっている、また Das Wort は講演の行われた時期を一九三六年としているが、彼の全集では一九三五年四月十六日となっている。E. Wiechert, Sämtliche Werke in 10 Bdn. Bd. 10, S. 368-380. この転載についても多くの研究が言及しているが、筆者がその所在を教えられた R. Schnell (注3) は、その抜粋の仕方、排除された要素など詳しく分析している。

(39) なおこの講演の載った号の「まえがき」には、「最良のドイツの文化的伝統を汚さずに保持し、引き継いでいくことは、亡命ドイツ作家の関心事であるばかりではなく、ドイツ国内のすべての誠実かつ廉直なる芸術家と学者の使命でもある(略)ドイツを支配している文化破壊者、戦争挑発者に対する抵抗がドイツ市民層に深々と根差し育っている」とあり、ここでも亡命者と国内亡命者が目的を等しくするものとされている。

(40) ベリィルントはそのような試みを「一九三七年の秋には第三帝国内の事情についての現実的な見積もりではなかった」と評している。Berglund, Einige Anmerkungen・・・(注3) S. 9. なぜならベリ

ィルントも指摘するように、もし国内の文学者が亡命雑誌に寄稿すれば、それだけでナチ当局には敵対者と見なされ、身に危険を引き寄せるようなものであったからである。この Das Wort への転載が直接の契機ではなく、反ナチ的なマルティーン・ニーメラー牧師の活動を援助したことを理由にではあるが、ヴィーヒェルトは一九三八年五月ブーヘンヴァルト強制収容所に収容されている（同年八月釈放）。なおヴィーヒェルトについては、Summer Kirshner, Some Documents relating to Ernst Wiecherts "Inward Emigration", In: German Quarterly, 38 ('65) No. 1. pp. 38-43.; Hildegard Chatellier, Ernst Wiechert im Urteil der deutschen Zeitschriftenpresse 1933-1945. Ein Beitrag zur nationalsozialistischen Literatur-und Pressepolitik. in: Recherches Germaniques. Université des sciences Humaines, Strasbourg, N° 3, 1973. S. 152-195.; H R. Klienenberger（注3）S. 135-165.

（41）注34参照。

（42）彼が会長に選ばれた様子については Briefe 3（注34）S. 167. それによれば彼は「政治的背景」があることを十分に承知していた。また「非政治的人間である自分が政治的目的にはもっとも適していることに気付かなかった」と弁明的に述べている（H. Carossa, Ungleiche Welten. In: Jubiläumsausgabe. Insel Verlag, Frankfurt/M. 1978. Bd. 3, S. 231-233). カロッサがナチの同調者であったか否かについては多くの相対立する議論があって、にわかには決し難く、ここでは深入りしない。ただ彼は一九三三年に芸術院新会員に招かれた時に、すでにトーマス・マンなどの去った後にどうして加わることができようかと入会を拒否したことを記しておく Briefe 2. S. 283-4. この問題をめぐってはたとえば、斎藤佑史「『異質の世界』におけるハンス・カロッサの反省と弁明について」　東洋大学工学部　昭和五三年教養課程研究報告がある。

（43）Berglund（注3）S. 15.

（44）Alfred Kerr, Die Illegalen. In: An den Wind geschrieben. Lyrik der Freiheit 1933-1945. Gesammelt, ausgewählt und eingeleitet v. Manfred Schlösser. Agora, Darmstadt, 1960. S. 251.

(zuerst erschien in; Neue Weltbühne 1937). 補注4参照。

(45) 亡命者によって用いられる国内亡命という「概念は多くの場合、ファシズムに感染せず、積極的であれ、受身的であれ、ナチのイデオロギーに逆らったすべてのドイツ人に対する一般的概念である、一九四五年以後になってはじめて、一九三三年に国内に留どまり（最後的に）同化させられなかった作家たちに対して専ら用いられるようになったと思われる。」Berglund, Einige Anmerkungen・・・（注3）S.8.

(46) クラウス・マン『反抗と亡命。転回点2』渋谷寿一訳　晶文社　一九七〇　一八〇頁。

(47) Berglund, Einige Anmerkungen・・・（注3）S.9.

(48) Berglund, Einige Anmerkungen・・・（注3）S.8.

(49) 七月二十日事件及びシュタウフェンベルクについては、Peter Hoffmann, Widerstand. Staatsstreich. Attentat. Der Kampf der Opposition gegen Hitler. Dritte, neu überarbeitete und erweiterte Ausgabe. R. Piper & Co. Verlag, München, 1979.; Kurt Finker, Stauffenberg und der 20. Juli 1944. Pahl-Rugenstein, Köln, 1977.; 小林正文『ヒトラー暗殺計画』中央公論社一九八四年など。

(50) ドイツ福音主義教会内のいわゆる「ドイツ・キリスト者」によるナチの教会政策に沿った教会改革運動が目指したのも結局は、政府によって公認されることであった。この問題については、Georg Denzler u. a. (Hrsg.), Die Kirchen im Dritten Reich. Christen und Nazis Hand in Hand? Bd. 1. Darstellung, Bd. 2. Dokumente. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt/M., 1984.; Klaus Scholder, Die Kirchen und das Dritte Reich. Bd. 1. Vorgeschichte und Zeit der Illusionen 1918-1934. Propuläen Verlag, Frankfurt/M., 1980. など。日本においても、例えば、「天人合一というのが臣道実践であり、天皇の大御稜威を世界に輝かせ奉ろうという私どもの目的が八紘一宇である、と説いて」いた「ひとのみち教団」（PL教団の前身）が弾圧されたことなどが、挙げられよう。小池健治他編『宗教弾圧を語る』岩波書店　一九七八。

(51) Frank Thieß, Innere Emigration. In: Arnold, Bd. I. (注3) S. 247–249. ティースはこの中で一九三三年に当時の帝国文化監視官であったヒンケル宛の書簡において、精神的ドイツに属するものは禁止や迫害によっても変節することなく、彼らに残された道は「国内亡命」以外にないと述べたことを主張している。この彼の言明は書簡の存在しない今となっては立証しえないが、彼にこの語を「抵抗」の意を込めて用いる資格があるか否かについては、肯定的な Günther Weisenborn, Der lautlose Aufstand. Bericht über die Widerstandsbewegung des deutschen Volkes 1933–1945. Röderberg Verlag Frankfurt/M., 1974. S. 261, 264. と R. Grimm, Innere Emigration als Lebensform. In: Exil und Innere Emigration・・・(注3) の否定的な見解がある。

(52) 文学以外の分野での抵抗については触れる余裕はないし、当面の課題と直接関係もないので、いくつかの文献を挙げるにとどめる。(a) Hans Rothfels, Deutsche Opposition gegen Hitler. Eine Würdigung. neue, erweit. Ausgabe, hrsg. v. H. Graml. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt/M., 1977. (b) Ger van Roon, Widerstand im Dritten Reich. C. H. Beck, München, 1979. (c) Chr. Klessmann u. a. (hrsg.), Gegner des Nationalsozialismus. Campus Verlag, Frankfurt/M., 1980. (d) R. Löwenthal u. a. (Hrsg.), Widertand u. Verweigerung in Deutschland 1933–1945, Dietz Verlag, Berlin, 1982. (e) Klaus Mammach, Widerstand 1933–1939. Geschichte der deutschen antifaschistischen Widerstandsbewegung im Inland u. in der Emigration. Akademie-Verlag, Berlin, 1984. (f) H. Elling, Frauen im deutschen Widerstand 1933–1945. Röderberg-Verlag, Frankfurt/M., 1979. (g) E. Hoernle, Deutsche Bauern unterm Hakenkreuz. Akademie-Verlag, Berlin, 1983 (zuerst erschien 1939, Paris). (h) 池田浩士『抵抗者たち。反ナチス運動の記録』ティービーエス・ブリタニカ　一九八〇。(i) 中井晶夫『ヒトラー時代の抵抗運動』毎日新聞社　一九八二。(j) 村瀬興雄『ナチス統治下の民衆生活――その建前と現実』東京大学出版会　一九八三。

(53) この問題を詳論しているのが、R. Schnell (注3) であるが、彼は国内亡命の作家の「内面性」ある

いは「精神性」が、ナチの精神構造や世界観に共通し、またナチに欠けるものを補完する所があったとして、国内亡命作家に対してはおしなべて厳しい見方をしている。

(54) Wolfgang Brekle, Die antifaschistische Literatur in Deutschland (1933–1945). In: Weimarer Beiträge, 1970, Nr. 6. S. 71f. ブレックレより具体的に抵抗文学を規定しているものに Emmerich がある。彼によれば抵抗文学に数えられるのは、(1)ドイツ国内で書かれ、非合法的抵抗活動の主要な構成要素となるもの、(2)国外で印刷され、ドイツへ密輸入された偽装文書、(3)ドイツ国内で生み出され、しかし国外で印刷され、そこで影響を持ったもの、(4)強制収容所あるいは投獄された抵抗者の文学的活動、(5)「奴隷の言葉」で書かれ、カムフラージュされ合法的に出版されたものである。Wolfgang Emmerich, Die Literatur des antifaschistischen Widerstandes. In: Die deutsche Literatur im Dritten Reich. hrsg. v. Horst Denkler u. a., Philipp Reclam jung., Stuttgart, 1976. S. 431–436. なお Brekle, Schriftsteller im antifaschistischen Widerstand 1933–1945 in Deutschland. Aufbau, 1985. が出版されているようであるが、筆者未見。

(55) さらに注目すべきは、最終節で「著者の世界観的立場」の故に必ずしもファシズムに対する「的確な批判」でなくともよいとされている点である。「的確な批判」には、ことに社会主義の立場にある研究者が、亡命文学あるいは国内亡命文学を論ずる場合に見られる社会主義的文学理論や唯物史観からの批判が前提とされている。ブレックレはこの問題に関しても柔軟であるといえよう。

(56) Ernst Loewy, Literatur unterm Hakenkreuz. Europäische Verlagsanstalt. Frankfurt/M. 3. überarbeitete Auflage. 1977. S. 294.

(57) Albrecht Haushofer, Moabiter Sonette. Deutscher Taschenbuch Verlag. 1976. 彼は一九四四年七月二十日のヒトラー暗殺計画に関与していたとして逮捕され、ドイツ敗戦直前に処刑された。Walter Stubbe, In Memoriam Albrecht Haushofer. In: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte. 8. Jahrg. (1960), S. 236–256.; Ch. W. Hoffmann, Opposition Poetry・・・(注3) S. 56–78.

(58) レヴィが国内亡命者は「かつて何であり、何をしたかではなく、いま何であり、何をしているかが問

題なのである」と言っているように、彼の前記（注55）の批判には国内亡命者の戦後における自己免責的態度への反発による影響が大きい。

(59) たとえば、Ricarda Huch, Kriegswinter. In: Gesammelte Werke. Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1971. Bd. 5. S. 306f. 補注7。Ch. W. Hoffmann はフーフの業績を十分に認めながらも、この詩を含む詩集 „Herbstfeuer“（1944）に収められた自然のイメジに包まれた彼女の詩は、人生の終局の自覚が自分の属する時代と世界が既に過去のものになっているという信念と結び付けられた「老年の詩」old-age poetry であって、そこに政治的要素を見いだすのは困難であるとしている（Ch. W. Hoffmann, Opposition Poetry・・・〔注3〕p. 6, pp. 137-8.）。たしかに八十歳という年齢が、彼女の作品に一種メランコリックな雰囲気を与えているとしても、その著者の精神の衰えを直ちに立証するとはかぎらない。この時代に発表された三巻から成る『ドイツ史』„Deutsche Geschichte“（1934-49）の第二巻では、ユダヤ人の運命に章を割き、また後に G. Weisenborn によってまとめられた『声なき蜂起』„Der lautolose Aufstand“（注51）のための資料を収集、保存していた冷静、強靭な精神の充実を見るべきであって、ホフマンの見解は容易には肯い難い。

(60) たとえば Wilhelm Lehmann, Schnelle Oktoberdämmerung. In: Sämtliche Werke. Sigbert Mohn Verlag, 1962. Bd. III. S. 473. 補注8。ただしレーマンを抵抗詩人に数えることはできないだろう。しかし教師の職にとどまるために様々な妥協を強いられたであろう彼の詩が、ランゲッサーの指摘にあるように（Schriftsteller unter Hitler-Diktatur〔注6〕）、その妥協を強いた時代によって少しも侵されていないことを証するには足るだろう。レーマンについては Hans Dieter Schäfer, Wilhelm Lehmann. Studien zu seinem Leben und Werk. H. Bouvier Verlag, Bonn, 1969.

(61) この件については「世界文学」（世界文学会　第四四号　一九七三）所載の拙論「ナチス・ドイツ国内のキリスト教作家・抵抗文学としてのキリスト教文学」において触れた。

(62) 受け手の側の消極的あるいは受身的抵抗としては「ナチズムと対立する優れたドイツ文学を読むこと、そうした文学を朗読したり出版すること、ドラマの特定の場面に拍手などによる反応を示すこと」も

含まれるという。Berglund, Einige Anmerkungen・・・(注3) S. 10.

(63) 「国内亡命」を上部概念とし、「ドイツ国内の反ファシズム的文学(文学的抵抗)」と「ドイツ国内の非ファシズム的文学(断固として局外にとどまった文学)」という二つの下部概念によって分類しようとする提案も、それ自体では啓発するところがあるが、使用に耐えない、という批判がある。R. Grimm, Innere Emigration als Lebensform. In: Exil und Innere Emigration (注3) S. 48.

(64) 徳川夢声『夢声戦争日記』昭和十七年六月六日の記事 中公文庫。

(65) 一九三九年にある亡命者が第三帝国内の文学について記している、「状況が違い、社会的事情が違っていれば理解されないばかりか、反動的で反革命的にすら思われるような描写が、第三帝国においては了解されるだろう。作家が仕事をしている特別の条件から出発しなければ、彼の作品の意味や本質を理解するのは不可能になるだろう。作家の作品に判断を下すには第三帝国内の様々な事情を正確に研究することが前提となる。」Kurt Kersten, Von den Methoden der Schriftsteller im Lande. In: Kritik in der Zeit. Hrsg. v. K. Jarmatz u. a. Mitteldeutscher Verlag, Halle-Leipzig, 1981. S. 326. (zuerst erschien in: Das Wort, 1939, 3.)

(66) この件に関しては、ホフマンが抵抗文学研究に際しての「読み込み」の危険を指摘しつつも次のように言う、「ナチスに反対する読者もしばしば同じことをしていた。ヒトラー時代にあっては、そうした読者は(略)通常の場合よりはるかにすすんで隠された意味を見いだそうとした。著者が単純な叙情詩以外に何も意図していないような詩行が、読者には抵抗詩として受け取られることも十分にありうるのだ」Ch. W. Hoffmann, Opposition Poetry・・・(注3) S. 4.

(67) Werner Bergengruen, Der Großtyrann und das Gericht. Hanseatische Verlagsanstalt, Hamburg 1935. この作品をめぐっては、W. Bergengruen, Schreibtischerinnerung. Nymphenburger Verlagshandlung, 1961, S. 180 ff. 及び R. Grimm, Innere Emigration als Lebensform. In: Exil und Innere Emigration (注3) S. 62. また検閲をめぐってのナチ党内の確執に関しては、D. Aigner, Die Indizierung・・・(注22)、及び(注71)参照。なおベルゲングリューンの前記作品及び亡命作家

の作品を含む、歴史小説全般については、R. Schnell（注3）の他に Elke Nyssen, Geschichtsbewußtsein und Emigration. Wilhelm Fink Verlag, München, 1974.; Hans Dahlke, Geschichtsroman und Literaturkritik im Exil. Aufbau-Verlag, Berlin u. Weimar, 1976.

(68) Karl F. Borée, Keine »Innere Emigration«? In: Neue Deutsche Hefte, 9 (1962) Nr. 85. S. 212.

(69) Klaus Jarmatz, Literatur im Exil. Dietz Verlag, Berlin, 1966. S. 70. 肯定的なものとしては、国外から持ち込まれた非合法文書と並んで、「カムフラージュされて合法的に出版された文学は、ファシズムの現実に対する眼を開かせた」という見解もある。W. Emmerich, Die Literatur des antifaschistischen Widerstandes（注53）S. 451.

(70) Reinhold Schneider, Die Sonette von Leben und Zeit, dem Glauben und der Geschichte. Hegner, Köln, 1954. S. 87. この詩が書かれたのは一九三八年、手書き複写が広まり、ひそかに印刷されたのは一九四四年。これについての詳細な分析は、Ekkehard Blattmann, Reinhold Schneider linguistisch interpretiert. Lothar Stiem Verlag, Heidelberg, 1979. S. 55-79. 補注5及び6。

(71) シュナイダーの例に限らず、第三帝国時代には「抵抗の流行形式」と言われるほど多くの詩人たちがこの形式を好んで選んだ理由については、ソネットという形式が元来ドイツ的乃至ゲルマン的精神にそぐわないのではないか云々につづけて、「詩人がソネットを書こうと企てること自体が第三帝国の文化的ゲルマン化政策に対する控え目なプロテストの行為と考えられる。ソネット形式の利用はさらに、ナチ的な党派的文芸の熱狂的で、というよりむしろ形式を喪失した讃歌に対する形式それ自体の肯定を意味している」という考察もある。Theodor Ziolkowski, Form als Protest. Das Sonett in der Literatur des Exils und der Innere Emigration. In: Exil und Innere Emigration（注∞）, S. 162. シュナイダーの詩については、Ch. W. Hoffmann, Opposition Poetry・・・（注∞）S. 79-102.; E. Blattmann, Über Reinhold Schneiders Sonett „Der Getriebene". Pragmalinguistische Überlegungen zur christlichen Literatur der Inneren Emigration (1933-945). In: Reinhold Schneider-Jahrbuch, Bd. 1, 1985. S. 159-204.; H. R. Klienenberger（注∞）S. 44-80.

(72) In: Tagesspiegel, Berlin. zit. nach Freiburger Katholisches Kirchenblatt. 4 (1948) Nr. 1, S. 1. シュナイダーの作品が戦地の兵士たちにも読まれ、慰めを与えていたことについては、Reinhold Schneider. Leben und Werk in Dokumenten. Hrsg. v. F. A. Schmitt. Walter Verlag, Olten u. Freiburg/Br., 1969.; Rudolf Hagelstange, Die Form als erste Entscheidung. In: Mein Gedicht ist mein Messer. Lyriker zu ihren Gedichten. W. Rothe Verlag, Heidelberg, 1955. S. 36.

(73) Werner Bergengruen, Dies irae. Eine Dichtung. Verlag der Arche, Zürich, 1945, 1963 (geschrieben im Sommer 1944). 彼の文学的抵抗については、H. R. Klienenberger (注3) S. 108-134.; Ch. W. Hoffmann (注3) S. 17-38.; Albert J. Hofstetter, W. Bergengruen im Dritten Reich (Dissertation), Luzern, 1968.; Erich Hofacker, Justice and Grace as presented in Bergengruen's Fiction. In: The Germanic Review, 3 (1956) pp. 97-103.: Max Frisch, Stimmen eines anderen Deutschland? Zu den Zeugnissen von Wiechert und Bergengruen. In: Neue Schweizer Rundschau 1945, S. 537-547. 柴田健策「ベルゲングリューンの《抵抗》について」ヨーロッパ文学研究 早稲田大学 第二号（一九六二）七三—九四頁。

(74) Franz Schonauer, Deutsche Literatur im Dritten Reich. Versuch einer Darstellung in polemisch-didaktischer Arbeit. Walter Verlag, Olten u. Freiburg/Br., 1961. S. 126. また小川悟他訳『第三帝国の文学』福村出版 一九七二 一七二頁。なおこの邦訳では Innere Emigration を「精神的亡命」としている。

(75) たしかに彼らの作品が、ショーナウアーの言うような深刻な打撃を与えることはなかったかもしれない。しかし体制にとって好ましくない、危険な存在であったことは、ベルゲングリューンが一九三七年に全国著述院から除名され、シュナイダーは一九四五年にマルティーン・ボルマンによって反逆罪で起訴されたことによっても推測される。Carl J. Burckhardt, Über Werner Bergengruen. Portrait und Bibliographie. Verlag der Arche, Zürich, 1968. S. 14.; Reinhold Schneider, Leben

u. Werk in Dokumenten（注70）S. 138f.

（76）一九六五年に Friedrich Franz von Unruh が「何年も独裁に耐えてきたと主張する『国内亡命』とかいう声が突然聞こえて来て、おそらくそう言う資格がある名前に並んで、憎むべきナチズムの流れに乗っていたものの名もあった」と回想している。zit. nach G. Berglund, Einige Anmerkungen ・・・（注3）S. 18. 責罪論については、》Als der Krieg zu Ende war《. Literarisch-politische Publizistik 1945-50. Hrsg. v. Bernhard Zeller. Kösel Verlag, München, 1974.; Bundesrepublikanisches Lesebuch. Hrsg. v. Hermann Glaser. Carl Hanser Verlag, München, 1978. など。

（77）クラウス・マン『危機の芸術家たち。転回点3』青柳謙二訳　晶文社　一九七二　二五六頁。

（78）Heinrich Mann, Verteidigung der Kultur（注38）S. 441.

（79）彼は継子レネルネの亡命許可を得ようと（上の娘は既に三九年に亡命していた）、彼の作品に好感を抱いていた内務大臣フリックに面会し（四一年十月二十三日）、同二十七日にはいわゆる「保護書簡」が与えられ、当面レネルネは強制収容所から免れた。しかし一年後（四二年十二月八日）に彼はフリックにもはや彼の妻子を保護できないことを告げられ、さらにゲシュタポのアイヒマンとも面会したものの事態は好転しなかった。J. Klepper, Unter dem Schatten Deiner Flügel（注8）及び Briefwechsel 1925-1942（注8）S. 227f.

（80）バルラハは一九三八年十月二十四日死去。クレッパーは一九四二年十二月十一日妻子とともに服毒自殺。

（81）Thomas Mann, Offener Brief für Deutschland. In: Arnold, Bd. I.（注3）S. 250 ff.

（82）E. Langgässer, Schriftsteller unter der Hitler Diktatur. In: Ost und West（注6）S. 36-41. 以下の引用はこれによる。

（83）この引用はランゲッサーから。しかしクレッパーも既に一九三三年に「たえず発言が妨げられている時に、語り手であるのは容易ではない」と書き付けている。J. Klepper, Unter dem Schatten Deiner Flügel（注8）S. 103, am 2. Sept. 1933. 及び（注9）。

(84) 亡命作家たちは、作家としてもまた生活者としても、多かれ少なかれ言語問題で苦しんだ。フォイヒトヴァンガーは、「自分の国の読者層を失った作家が、同時に経済的存在の中心をも失うことがしばしばだった」とし、また故国にいる時には夢にも思わなかった内面的困難として、「母国語の生き生きとした流れから切り離されているという辛い体験」をあげている。L. Feuchtwanger, Arbeitsprobleme des Schriftstellers im Exil. In: Arnold, Bd. I. (注3) S. 240. またたまたま乗ることができた船の都合でニュージーランドに渡ってしまった Karl Wolfskehl の場合には、町にドイツ語を理解する人は学校の教師が一人しかいなかったという。彼は一九四八年に亡命地で孤独の内に亡くなったが、Sang aus dem Exil. Verlag Lambert Schneider, Heidelberg, ohne Jahresangabe (zuerst in Origo Verlag, Zürich, 1950) などを遺した。J. A. Asher, Wolfskehl in Exile. In: AUMLA. Vol. 9 (1958), pp. 65–71.; G. E. Bell, Letters from Karl Wolfskehl, written during his time of exile. In: AUMLA. No. 37, May 1972. pp. 57–72.

(85) Alfred Andersch, Deutsche Literatur in der Entscheidung. zit. nach P. Mertz (注3) S. 62.

(86) Kurt Kersten は第三帝国内の作家の創作の困難に言及しているなかで、「彼の取り上げようとしていることの多くを沈黙しなければならない（略）しかし蚕に紡ぐことを禁ずることはできない」と言う。Kurt Kersten, Von den Methoden der Schriftsteller im Lande (注3) S. 325.

補　注

1. Lyrisches Tagebuch aus den Jahren 1933 bis 1945

Gertrud von le Fort

I.

Vergessenes Vaterland–Vaterland der Vergeßnen,

Ehrfürchtig-liebliches Land, dem einst die himmlische Stimme
Hölderlins Lorbeern gestreut:
»O heilig Herz der Völker —«
Des hohn Gesanges und der göttlichen Ahnung
Ernste und holde Heimat, »du Land der Liebe«:
O laß mich knien an deinem erschütternden Grabe!

Versunken liegt es – kaum, daß der nackte Hügel
Demütig noch sich hebt aus den starrenden Schollen
Eisenbesäter Flur – und verwahrlost liegt es:
Der schweifenden Wind Atem nur flüstert darüber hin
Wie in verwelkten Gesängen,
Oder wie in den Wäldern verschollener Landschaft.

Denn blicklos hastet an ihm vorbei
Der neue, der irdische Mensch, der selbstgewisse, gewaltige,
Selten nur bleibt er stehn, von heimlichen Schauern
Widerwillig geschüttelt und ohne Rührung
Wendet er sich zurück in den Lärm seiner Tage.
Nur der Verstorbenen treue Schatten neigen sich über den Hügel,
Mit stillen Gesichtern, voller Hoheit und Liebe
Flehen sie sprachlos mich an
Gleich den Gestalten eines anderen Volkes・・・

Vergessenes Vaterland – Vaterland der Vergeßnen,
Unvergeßliches Land,
O hauche noch einmal deine geliebte Seele
Auf einen lebendigen Mund,
Daß ich der Stimme deiner Unsterblichkeit lausche,
Bevor ich sterbe —
Aber du schweigst der Verklärten unsägliches Schweigen.

II.

Ich weiß noch, wie es begann: mir träumte nächtlich,
Auch Lieder könnten sterben: ich sah meine eignen
Gleich kleinen, toten Kindern im Sarge liegen
Und weinte empor: die Nacht war gewittersüchtig,
Düster und schwül. Im Hof verstummte der Brunnen.
Ein rotes, fremdes Gestirn erschreckte den Himmel,
Da hört ichs flügeln:
Wie reisende Vogelgeschwader rauschten sie her, die großen Gesänge der Vorzeit,
Langsam und feierlich, Jahrhundert um Jahrhundert
Zogen sie über mich hin, fort in die Ewigkeit —
Und vom Gebirge her hört ich noch einmal
Die schwanenen Stimme der letzten:
»O Land der Liebe, leb wohl!« —

Seither hör ich keinen Gesang – tief in der Seele
Fiel eine Türe zu: es ist vorüber.

III.
Doch selig ist heut zu verstummen,
Süß ist es abseits zu stehn vom schändlichen Ruhm des Tages,
Licht ists im Schatten zu wohnen,
Vergessen werden ist Huld, und vereinsamt werden ist Gnade,
Getröstet wird nur noch, wer weint, —
Denn Weinen heißt Lieben,
Und Lieben heißt Untergehn, heißt lebendiges Sterben!

So schlafe denn, schlafe mein Mund —
Schlaf ist dem Tode verschwistert.

IV.
Viele zogen hinweg, ich aber bleibe
bei meines Vaterlandes Gruft: zum hilflosen Hügel
Wein' ich mich nieder, daß meine zärtlichen Kniee
Den fast versunknen bezeugen.
O nahe mir, süße Verzweiflung,
Vorfrühling meines Todes und letzter Frühling der Liebe
Zum herrlichen Vaterland, daß ich die Einsamkeit küsse,

Die hohe Schwester der Trauer, die schweigsame Freundin,
Die einzge, die mit mir wacht!

2. Die Vertriebenen

I.

Sie konnten den Füßen befehlen,
Daß sie von hinnen gehn,
Sie konnten der Welt erzählen
Es wolle uns keiner mehr sehn.

Sie konnten die Tür uns weisen
Wie es ihnen gefällt
Und uns vergrämen, vergreisen —
Kein Mensch, ders ihnen vergällt.

Aber das Land ist geblieben,
Das stille wahrhaftige Land:
Das hat uns nicht vertrieben,
Das hat uns treulich bekannt.

3. Gesang des Deutschen

Friedrich Hölderlin

O heilig Herz der Völker, o Vaterland!

Allduldend, gleich der schweigenden Mutter Erd,
Und allverkannt, wenn schon aus deiner
Tiefe die Fremden ihr Bestes haben!

Sie ernten den Gedanken, den Geist von dir,
Sie pflücken gern die Traube, doch höhnen sie
Dich, ungestalte Rebe! daß du
Schwankend den Boden und Wild umirrest.

Du Land des hohen ernsteren Genius!
Du Land der Liebe! bin ich dir deine schon,
Oft zürnt ich weined, daß du immer
Blöde die eigene Seele leugnest.

4. Die Illegalen

Alfred Kerr

1

Die Welt erfährt kaum, wie sie heißen.
Sie schweben dahin, dunkel und licht.
Man will den Hut vom Kopfe reißen,
Sie tausendmal grüßen——sie sehn es nicht.
Sie schreiten und gleiten; Stürme tosen,
Manchen packt es, er lebt nicht mehr;

Doch lebt der Bund der Namenlosen,
Das unsichtbare Helferheer.
Die Folter droht, die Qual ist bitter——
Der Kampf geht weiter unbeirrt.
Sie sind Heiligen und die Ritter
Des Menschenreichs, das kommen wird.

2

Uns ist die Heimat tief entehrt,
Längst hat sich macher abgekehrt.
Wir sind Verbannte, Leid-Erkorene,
Ein Land erstirbt, ein Traum zerstiebt;
Ihr aber seid das Unverlorene,
Was wir an Deutschland einst geliebt.

Wir heben die Hände zum Lichtrevier.
Deutschland——seid Ihr.

5. Antichrist nach Luca Signorelli

Reinhold Schneider

Er wird sich kleiden in des Herrn Gestalt,
Und Seine heilige Sprache wird er sprechen
Und Seines Richteramtes sich erfrechen

Und übers Volk erlangen die Gewalt.

Und Priester werden, wenn sein Ruf erschallt,
Zu seinen Füßen ihr Gerät zerbrechen,
Die Künstler und die Weisen mit ihm zechen
Um den sein Lob aus Dichtermund hallt.

Und niemand ahnt, daß Satan aus ihm spricht
Und seines Tempels Wunderbau zum Preis
Die Seele fordert, die er eingefangen;

Erst wenn er aufwärts fahren will ins Licht,
Wird ihn der Blitzstrahl aus dem höchsten Kreis
Ins Dunkel schleudern, wo er ausgegangen.

6. Allein den Betern R. Schneider

Allein den Betern kann es noch gelingen,
Das Schwert ob unsern Häuptern aufzuhalten
Und diese Welt den richtenden Gewalten
Durch ein geheiligt Leben abzuringen.

Denn Täter werden nie den Himmel zwingen:
Was sie vereinen, wird sich wieder spalten,

Was sie erneuern, über Nacht veralten,
Und was sie stiften, Not und Unheil bringen.

Jetzt ist die Zeit, da sich das Heil verbirgt,
Und Menschenhochmut auf dem Markte feiert,
Indes im Dom die Beter sich verhüllen.

Bis Gott aus unsern Opfern Segen wirkt
Und in den Tiefen, die kein Aug' entschleiert
Die trocknen Brunnen sich mit Leben erfüllen.

7. Kriegswinter Ricarda Huch

Laßt uns ein wenig von dem holden Frühling träumen,
Jetzt in des Winters Graun;
Wenn die Knospen wieder schwellen an den kahlen Bäumen,
Wie Honig braun.

Die Erde bebt von der Schlacht und die Luft von Kanonen.
Laßt uns dicht am Kamin
Von einem Walde reden, wo Anemonen
Aus dürren Blätter blühn.

Es klebt noch ein grauer Schnee unterm welken Strauche

Und in schattiger Kluft,
Doch war es eben, als ob vorüberhauche
Ein süßer Duft.

Es raschelt von den erwachenden kleinen Tieren;
Bald hört man schon
Noch oben im Gewölk eine Lerche jubilieren.
O seliger Ton!

Wir hörten lange nichts als der Sterbenden Stöhnen.
So jung dahin!
Und Mütter jammern nach den verlornen Söhnen,
Nach des Lebens Sinn.

Was man von Gott spricht, dem Vater in himmlischen Räumen,
Ist das nur Rauch?
Laßt uns ein wenig von dem holden Frühling träumen,
Und von Frieden auch.

8. Schnelle Oktoberdämmerung Wilhelm Lehmann
Eilig geht die Dämmerung mit mir den verglommnen Weg entlang.
Dompfaff knistert mit dem Schnabel, morgen glückt vielleicht Gesang.

Wie die Dämmerung sich sputet! Ruhig duftet Hopfenblüte,
Ohne Sorge trägt Resede ihre Saat in grüner Tüte.
Sei nicht ängstlich, du bist nicht allein. Über dir hörst du den Wind die welken
Weidenblätter brechen,
Unter dir im Erdendunkel mit sich selbst die Spitzmaus sprechen.